ナシ
納西族の住居の空間構成

中国の古羌系民族の住居と集落に関する研究 その3

SPATIAL COMPOSITION OF THE NAXI HOUSE

A study on spatial composition of settlements and dwellings of the Old Qiang tribes Part 3

井上 えり子*

Eriko INOUE

The purpose of this paper is to clarify spatial composition of the Naxi house. In conclusion,

- (1) Although the plans are similar between the western people's house of Naxi and the eastern one, the principles of spatial composition are different.
- (2) In western people's house, the main room is divided into two spatial sections, which are male space and female one by diagonal axes of the "higher fireplace". And these principles of spatial composition are similar to Qiang's and Muya Tibetan's.
- (3) In eastern people's house, the principles of spatial composition are mixed with the one of the different culture.

Keywords : *the Old Qiang tribes, Naxi, dwelling, spatial composition, China*

古羌系民族, 納西族, 住居, 空間構成, 中国

1. はじめに

本研究は、古羌系民族に共通して見られる空間特性について明らかにし、現在は別々の民族として認識されている各民族の住居空間概念を捉えなおすことを目的としている¹⁾。本稿では、納西(ナシ)族の空間構成について明らかにする。

納西族のルーツについては、中国西北部の河湟地帯に住んでいた古羌人が南遷・西遷を繰り返し、現在の金沙江上流域に住み着いたと考えるのが有力である²⁾。そしてその時期については、「殷周時代から新石器時代にまで遡る³⁾」ほど古いと考えられている。金沙江流域では約170万年前の元謀猿人の存在が明らかになっているため、古来の土着の民族と古羌人が融合していくなかで納西族が生まれた可能性もある。

納西族は、言語で分類すると西部人(約25万人)と東部人(約4万人)に大別でき、両者の言葉の違いは大きい⁴⁾。有名なトンパ文字の担い手は西部人であるが、実は東部方言に近いという。

西部人の大部分を占めるのは、自称「ナシ(納喜)」で、主に雲南省麗江・永勝・中甸・維西、四川省木里・塩源等に居住している。東部人は、自称「ナズィ(納日; 雲南省永寧, 四川省瓜別・博瓦・項脚等に分布)」、「ナヒ(納恒; 雲南省北渠坝等)」等にさらに分かれる。さらにナズィ人の中で、雲南省と四川省にまたがる泸沽(ロコ)湖湖畔に居住し母系社会を採る一群は、一般に「モソ(摩梭)人」と呼ばれ、古参の人々とされる⁵⁾。

本報では、東部人の中から、この地域の古くからの居住者で特徴的な生活習慣をもつ「モソ人」を選び、西部人の大部分を占める「ナシ(納喜)人」と比較しながら分析をおこなう。

2. 調査概要

分析は、現地での実測調査で得られたデータにもとづいておこなった。調査期間は1999年8月13日～9月4日で、調査地は中国四川省凉山彝族自治州塩源県および雲南省寧蒗彝族自治州⁶⁾の4集落である。また、1993年にもモソ人住居の調査に参加する機会があったため⁷⁾、一部の分析にはそのときのデータも含めた。本稿に関する調査内容を表-1に示す。なお、本文中では事例番号は、1993年調査のモソ事例を「m-○」、1999年のモソ事例を「M-○」、1999年のナシ事例を「N-○」と区別して表記する。

3. 調査対象集落の概要

調査集落は4つとも、雲南省と四川省の境に位置する泸沽湖湖畔に立地する。高度は4集落ともほぼ2,690mとなる。

ジョア村は湖の北岸(四川省側)に位置するモソ人の集落である。集落は、言い伝えによれば、300年ほど前に成立したという。現在では集落の範囲が広がり、イ族や漢族等の他民族も混在して居住している。モソ人の住居は全部で9戸である。

ロシュ村は湖の南岸(雲南省側)に位置する。上村と下村の自然集落に分かれ、上村はプミ族の集落で、下村がモソ人の集落である。下村は30戸で構成される。近年観光地化がすすんでいる。ロシュ村については1993年にも調査をおこなっている。

チョンシュ村は湖の西岸(雲南省側)に位置する。比較の対象として1例だけ採取をおこなった。

グーズィ村は四川省側に位置し、周辺で唯一のナシ人集落である。もともと50戸程度の集落だったらしいが、近年になって分家が急増

* 京都女子大学短期大学部生活科学科生活造形専攻
講師・工修

Lecturer, the Living Design Course, Dept. of Science of Living, Kyoto Women's
Junior College, M. Eng.

表一 調査内容

	調査集落	調査内容
モソ人	ジョア村	平面図 (1/50; 1例), 簡略平面図 (1/200; 7例), 断面図 (1/50; 1例), 配置図 (1/200; 1例), 展開図 (1/20; 1例), 詳細図 (1/5 ~ 1/10), ヒアリング (対居住者; 8例)
	ロシュ村 (下村)	集落図 (1/500), 平面図 (1/50; 6例), 簡略平面図 (1/200; 24例), 断面図 (1/50; 6例), 配置図 (1/200; 6例), 展開図 (1/20; 1例), 詳細図 (1/5 ~ 1/10), ヒアリング (対居住者; 30例, 対大工; 1例)
	チョンシュ村	平面図 (1/50; 1例), 断面図 (1/50; 1例), ヒアリング (対居住者; 1例)
ナシ人	ダーズィ村	平面図 (1/50; 4例), 簡略平面図 (1/200; 28例), 断面図 (1/50; 4例), 配置図 (1/200; 4例), 展開図 (1/20; 2例), 詳細図 (1/5 ~ 1/10), ヒアリング (対居住者; 32例, 対ダバ ⁹⁾ [トンバ教の僧であり巫師]; 1例, 対大工; 1例)

1993年度調査も一部含む

表二 生活の様子 (ヒアリングより)

	モソ人	ナシ人
生業	農業	トウモロコシ, じゃがいも, ソバ, 小麦, 四季豆 等
	牧畜	山羊, 馬, 黄牛
	漁撈	白魚 (湖)
	他	漢方薬採集, 観光業 (ロシュ村)
宗教	チベット仏教 (雲南側/黄教, 四川側/黒教), ダバ教, アニミズム	チベット仏教 (黄教), トンバ教, アニミズム
燃料等	電気; 雲南省側/有, 四川側/無 ガス; 無 水; 山から引く, 湖の水	電気; 無 ガス; 無 水; 山から引く, 湖の水
社会形態・婚姻形態	母系社会; 最年長女性が家長。 妻問婚; 男性は, 昼間は生家で生活し夜に妻の家に通う。	父系社会; 年長男性が家長。 近親婚; 近年まで集落内近親者どうしの婚姻があった。

し現在は109戸で構成されている。村の言い伝えによれば, 村の大部分の人の祖先は, 三~四百年前に麗江からやってきた3人の男 (非親戚) だという。ナシ人には近親婚の習慣をにおわす神話があるが, ダーズィ村でも同村内での婚姻が一般的で, 十数年前までは近親婚も少なくなかった。このように閉じた人間関係のもとで, 最近まで周辺の他民族からの影響が比較的少なく, 古い習慣を保持して生活している。

モソ人とナシ人の生活の様子について表二に示す。

4. モソ人の住居

4.1 住居の概要

敷地は, 主屋といくつかの別棟で庭を囲むことにより構成される (図一1)。主屋は切妻屋根 (平入り) の平屋建である。累木式構法の主室および食糧庫のまわりに, 軸組+版築構法の外壁を付加することで室空間をつくっている (図二)。

別棟は, 多くは2階建て片廊下型の平面である。家畜小屋・チベット仏教の経堂・就寝室 (主に2階部分)・収納庫等に使用される。便所は元来ないが, 近年は別棟でつくる場合もある。

4.2 主屋の平面構成

主屋は, 日常生活全般がおこなわれる主室 [ジミ]⁹⁾といくつかの室によって構成される。主室と他室との関係をあらわすと表一3のようになり, 主室のまわりを他室が取り囲む構成となっていることがわかる。主室以外の室は4つの領域に大別できる (表一3内, A~D)。Aの空間には前室 [ザコ] が置かれる。前室は, 住居にアクセスする際のホールのな役割を担う。また, Aの空間が2つに分けられることもあり (14/30例), その場合, もう1室 [ザコツォ] は前室からアクセスする就寝室となる。Bの空間は, 1室で構成されることが多く (19/30例), その用途は物置 (16/19例) や経堂 [ガサズ] (3/19例) である。2室に分かれる場合 (8/30例), 手前の室は就寝室としてしつらえられている。Cの空間も1室で構成されることが多く (23/30例), その用途は家畜用厨房 [ズィタ] あるいは物置となっている。BとCの用途の違いはモソ人の空間概念に関係すると思われる。すなわち「右 (図でB側)」が「左 (同C側)」よりも優位であるとされている。Dの空間は, 主室からアクセスする後室 [ドゥパ] であり, CあるいはBとの間の角に累木式構法の食糧庫 [ギエ] が置かれる (23/30例)。以上を, 地域差も考慮してまと

図一 ロシュ村集落図 (1/2000; 部分; 1993.8現在)

図二 モソ人住居の事例 (主屋のみ; 1/200; M-03)

めると、モソ人の住居の平面構成は、建築年代にかかわらず、図一3のようになる。

次に主室の構成について述べる(図一4)。主室はほぼ正方形である¹⁰⁾。板床部分と土間床部分に二分され、その境界に2本の柱「男柱[ゾドミ]」「女柱[ミゾドミ]」が立つ(30/30例)。前室からの入口は土間床側に、後室への出入口は板床側にある(30/30例)。主室の4壁面のうち2面には、奥行約1mの縁台(h=500~800程度；後室側[グァウ]、脇室側[ググァマ])が造り付けられている(30/30例)。室内には2つのイロリがある。土間床側の縁台と同じ高さのイロリは「上のイロリ」と呼ばれ、板床側の低いイロリは「下のイロリ」と呼ばれる(30/30例)。下のイロリの正面には造り付けの棚があり、火の神[ザバラ]がまつられている(30/30例)。また、板床側に造り付けのベッド(下部；収納庫)がある(30/30例)。以上のように、主室内はどの事例もほぼ同じ構成をとっており、はっきりとした規範が現在も残っていることがわかる。ところで四川省のごく一部に、主室内のこの配置が反転している例が見られた(1/30例)。

4.3 住生活

4.3.1 家族構成

前述の通り、モソ人社会は母系社会である。1993年の調査によれば、家長は一般に最年長の女性である(22/28例)。例外の6例は、老女性の存命中に家長権を譲っている事例である。家長権とは、具体的には、財産・家計を管理し、主室の造り付けベッド下部の収納庫や食糧庫の鍵を管理することを指す。

婚姻形態は妻問婚を採っているため¹¹⁾、家族構成は不安定である。男性は昼間は生家で過ごし夜だけ女性のもとへ通うのであるが、通わなくなると婚姻が解消されたことになる。そのため一生のうちに平均して5~6人の伴侶をもつことになる(ただし複数の女性へ同時に通うのはタブーとされる)。子供はもちろん女性の側に帰属する。

女性の家族は、通ってくる男性を簡単に家族の一員として認めるわけではない。1993年の調査によれば、通ってくる男性の存在すら認めない場合も多く、存在が認められるには少なくとも、女性に子供を産ませた実績が必要であった¹²⁾。

妻問婚が一般的ではあるものの、夫婦が同居している事例も少ない(15/30例)。そのうちの8例が老年夫婦であることは、偶然ではないと思われる。というのも、調査事例を見る限り、男性の生家の家長が姪(姉妹[前家長]の娘)の代になったとき、老年男性が姪家族と同居している例はないからである。つまり、老年になると男性は、出自の家での居場所がなくなり、通う先の家が物理的にも意識的にも「家」となっていくのだと思われる。それは死に際しても同様で、1993年の調査中、老年男性の葬式が女性側の家(m-14)でとりおこなわれていた。

同居している事例で老年夫婦でない場合は、娘がいなかったため息子が嫁をめとった例(父系社会における婿養子の反転した例)が多い(5/7例)。

4.3.2 妻問婚における就寝の場

就寝については、家長は、主室内の造り付けベッドを使用するのが一般的である(19/30例)。ただし、老年女性の存命中に次世代へ家長権が移った場合(6/30例)、老年女性がそのまま主室内ベッドに

表一3 主室の構成(モソ人)

(単位: 例)

主室の構成	主室をA・B・C・Dが取り囲む型	A又はDがない型	B又はCがない型	AとDがない型	計
雲南	17	2	2	1	22
四川	7	1	0	0	8
計	24	3	2	1	30

・A・B・C・Dは必ずしも壁で仕切られているわけではない

図一3 主室の平面構成(モソ人)

図一4 主室の構成(M-02)

就寝していることもある(3/6例)。また「老人がいらない(M-06)」等の理由で、使用していない例もある(5/30例)。

家長以外については、就寝場所として主室内の縁台部分・脇室・別棟の2階が使用される。若年男性(11~39才)は、ほとんど別棟を使用している(37/41人)。主屋を使用する場合でも主室以外の室を使っている(3/4人)。ただし、前述の通り、通う相手がいる場合には、夜は女性の家で過ごすことになる。

家長以外の女性については、これまでの民俗学の文献では「別棟

で男性の訪問を受ける」となっている¹³⁾。しかし1993年調査のデータから、2つの場合に大別できることがわかった(表-4)。一つは、今までの文献の通り、別棟で就寝している場合である。もう一つは、前室脇の就寝室「ザコツォ」を使用している場合である。この室に就寝している女性は、長女で、かつ、子供を産んでいない若い女性であることが多い(m-01, 03, 05, 08, 09, 13, 15, 18)。彼女たちの多くは、ヒアリングでの感触から、通ってくる男性がいると思われるものの、タブーのためそれを公言することはなかった。しかし1999年調査で改めて問い直したところ、「前室脇の室は男性が通ってくる室」と認めた人もいた(m-09)。

子孫繁栄を願う家長にとって、長女(未来の家長)がどのような子を産むかは重大な関心事であろう。その意味で、前室脇の就寝室は、通ってくる男性を把握するうえで最も適した室である。なぜなら、壁を挟んだ隣には、家長のベッドがあるからだ。男性は女性の家族と顔を合わせないで室に入ることができるものの、物音等からしっかり把握されているのである。

ところで、四川省側のように前室脇に室がない場合もある。この

ような場合、女性は脇室(表-3内B)を使用することが多い。

4.3.3 イロリまわりの着座位置

就寝以外の日常生活について、その大部分が行われるのは主室である。イロリは2つあるが、日常生活で使用されるのは下のイロリの方である。下のイロリは暖を採るだけでなく、食事をつくるのに使用される。食事でも下のイロリのまわりで食べる。イロリまわりの着座位置は、神棚¹⁴⁾に向かって左右に男女の領域が分かれ、神棚に近いほうから上座となる(図-5)¹⁵⁾。

4.3.4 非日常時の空間領域

死亡すると遺体は一時、上のイロリのそばに置かれる(図-6)。その後、埋葬日まで後室に安置もしくは埋められる。1993年の調査中に遭遇した葬式では、上のイロリにチベット仏教の仏具や供物が置かれ、ラマも上のイロリ側に座っていた(m-14)。このように葬式時には、日常と異なる空間の領域分けが認められた。

結婚式については、モソ人は妻問婚を習慣とするため、式・祝宴のようなものは存在しなかった。

表-4 就寝場所(ロシュ下村; 1993.8現在)

<p>m-01/5人</p>	<p>m-06/7人</p> <p>(O25は四川省出身)</p>	<p>m-11/7人</p> <p>3年改築中 2年改築中 1年改築中 主室 イロリ 神棚 仏具 供物</p>	<p>m-16/8人</p>
<p>m-02/7人</p>	<p>m-07/7人</p>	<p>m-12/9人</p>	<p>m-17/5人</p> <p>子供が大きくなったための拡張</p>
<p>m-03/6人</p>	<p>m-08/6人</p> <p>△は一人っ子なので、隙をもらった</p>	<p>m-13/5人</p>	<p>m-18/5人</p>
<p>m-04/8人</p>	<p>m-09/7人</p>	<p>m-14/9人</p> <p>2F 1F イロリ 神棚 仏具 供物</p>	<p>M-03/6人</p>
<p>m-05/6人</p>	<p>m-10/11人</p> <p>1993年改築 △は仏具を祀る部屋</p>	<p>m-15/9人</p> <p>立間 イロリ 神棚 仏具 供物</p>	<p>M-05/6人</p>

凡例 ○: 女性 (●は非同居, ○は死亡), ◎: 家長
 △: 男性 (▲は非同居, △は死亡) 数字: 年齢 (*: 不詳)
 ○=△: 同居婚 ○=▲: 妻問婚
 ○=▽: 認めていないものの、ヒアリングの様子から通ってくる男性がいると思われる

・M-03, M-05については、1993年・1999年に調査をおこなった。事例番号は1999年のものになっているが、この表では1993年時点の内容である。
 ・食糧庫等、就寝空間に関係ないものは、一部省略している。

5. ナシ人の住居

5.1 住居の概要

敷地は、モソ人と同様、主屋といくつかの別棟で庭を囲むことにより構成される。主屋は平入り・平屋建て、累木式構法の主室のまわりに外壁を付加する形式も共通している(図-7)。ただしモソ人のものと比べて軸組が曖昧で、多くの場合、屋根の荷重を版築部分と補強の突っかい棒によって支えている¹⁰⁾。別棟は、主に家畜小屋と収納庫に使用され、一部就寝室にも使用されている。モソ人のように敷地内に経堂をもつ例は、ほとんどなかった(1/32例)。便所もない。

5.2 主屋の平面構成

主屋の構成もモソ人の場合と似ている(表-5)。ただし、主室[ジメ]を他室が取り囲む型のうち、6/12例は最近の増築であることがわかっている。

Aの空間は前室[ココブココ]であり、1室で構成されることが多い(21/26例；前室がない事例を除く)。主室への出入口がある。Bの空間は家畜用厨房[ズグッ]として、Cの空間は物置として使用することが多い(26/32例)。Bの奥、つまりDとの間の角には、累

表-5 主屋の構成(ナシ人)

(単位: 例)

主屋の構成	主室をA・B・C・Dが取り囲む型	A又はDがない型	Cがない型	A・Dの片方とCがない型	その他	計
例数	12	2	11	6	1	32

・A・B・C・Dは必ずしも壁で仕切られているわけではない

図-8 主屋の平面構成(ナシ人)

図-5 イロリまわりの座位(モソ人)

図-6 葬式時における上のイロリ(M-01)

図-9 主室の構成(N-02)

図-7 ナシ人住居の事例(N-04)

木式構法の食糧庫〔ゴウ〕が置かれることが多い(22/26例)。Dの空間は後室〔クツォ〕である。以上をまとめると、現在のナシ人の住居の平面構成は図-8のようになる。

主室は、モソ人と同様ほぼ正方形であるが、規模はやや小さい¹⁷⁾。また、構成もモソ人と似ており(図-9)、①板床部分と土間床部分に二分されること、②前室からの入口は土間床側に、後室への出入口は板床側にあること、③主室の4壁面のうち、2面に縁台が造り付けられていること、④室内には2つのイロリがあること、⑤これらの特徴が全事例に見られることが共通している。異なる点は、①必ずしも柱が2本ではないこと(2本:28/32例)、②下のイロリ側に神棚は置かれなないこと(下のイロリ側に有:2/32例)、③必ずしも板床側の造り付けベッドがあるわけではない(造り付けベッド有:21/32例)こと④縁台部分が3方向であること(31/32例)である。

①については、2本の柱をもつ場合のほうが、1本の柱(主室中央に立つ)の場合(4/32例)より多いので、現在は2本柱のほうが一般的といえる。しかし、柱が1本である事例はいずれも建設年が古いこと(表-6)、2本柱の場合でも柱の名前が「男柱」「女柱」のように分かれることがなく2本とも「中心柱〔ムドゥ〕(他の柱は〔ドゥハ〕)」と呼ばれていることから、1本柱を例外とするのは留保したい。②については、上のイロリ側(縁台の角)に置かれている(32/32例;うち2例は、下のイロリ側と上のイロリ側の両方に置かれている)。

5.3 住生活

5.3.1 就寝の場

ナシ人は父系社会であり同居婚をとる。そのため家長は最年長の男性である。家長の就寝場所には、多くの場合、主室内の上のイロリ側縁台の神棚前が使用される(24/32例;図-10)。ただし、老年男性の死亡により家長権が息子に移ったものの、老妻が健在であるために、息子は妻子とともに別棟で就寝している例もある(4/32例)。最年長の女性が就寝しているのは、上のイロリ側縁台の神棚横あるいは造り付けベッドの位置が多い(それぞれ13/32例)。ただし、上のイロリ側に寝ているのは、最年長女性か若くても家長の妻に限られているため、こちらの場合のほうが強い規範をもつように感じられる。一方、造り付けベッドやベッドを置いて就寝している場合には、「孫と寝るため(N-9)」幅の狭い縁台(80cm~1m)を避けている例もあった。

ちなみに、家長の世代交代にともない、妻も就寝場所の交代がおこなわれているのは1/11例しかない。

下のイロリ側にも、少数ではあるが、就寝の場として使用している例が見られた。事例数が少ないため断言はできないが、下のイロリに向かって右側に女性、左側に男性が就寝している。そして就寝しているのは子供世代である。その他、主室では、後室への出入口付近の縁台も就寝に使用されている。

また、別棟(家畜小屋の2階)も就寝の場として、若い世代や家長の弟家族に多く使用されている(32/32例)。

5.3.2 イロリまわりの着座位置

その他の日常生活についても、大部分が主室でおこなわれる。食事・炊事には上のイロリが使用される。下のイロリを普段使用すること(火をつけること)はない。上のイロリまわりにおける着座位置については、イロリの対角線で男女の空間が分かれ、神棚に近い

表-6 主室内の柱数と建築年

柱1本		柱2本	
事例NO.	建築年	事例NO.	建築年
N-01	50年以上前	N-03	3~4代前
N-02	150年以上前	N-05	50~60年前
N-04	3代くらい前	N-06	1989年
N-18	3代くらい前	N-07	1997年
柱1本の場合 柱2本の場合		N-08	1995年
		N-09	1981年
		N-10	1993年頃
		N-11	1999年
		N-12	3~4代前
		N-13	1982年
		N-14	3~4代前
		N-15	1990年
		N-16	1987年
		N-17	1964年
		N-19	1984年
		N-20	1964年
		N-21	1977年
		N-22	1979年
		N-23	1967年
		N-24	1994年
		N-25	1984年
		N-26	1980年
		N-27	1993年
		N-28	1991年
		N-29	1989年
		N-30	3~4代前
		N-31	3~4代前
		N-32	1986年

主室以外は省略

凡例

- △: 最年長の男性(家長)
- : 最年長の女性
- △: 成年男性(△以外)
- : 成年女性(○以外)
- △: 子供(男子)
- : 子供(女子)
- 数字: 事例NO.
- : 一緒に寝ていることを示す
- ⊗: 最年長の女性ではあるが、家長の妻ではないことを示す(夫は亡くなり、家長が息子に移った老年女性の場合等)
- ⊙: 最年長の女性ではないが、家長の妻であることを示す(男は亡くなったが、姑が健在の場合等)

図-10 就寝場所(ナシ人)

図-11 イロリまわりの座位(ナシ人)

ほうから上座となる（図-11）。

5.3.3 非日常時の空間領域

死亡すると、遺体は埋葬の日まで後室に埋められる。葬式時に使用されるイロリは、主には上のイロリであるが下のイロリも使用される。その座位は、図-12に示すように変化する。

結婚式や成人式において、主に使用されるのは上のイロリである。その座位は事例によって少しずつ異なるが、図-13、14に1例を示す。

以上のように、ナシ人においても、非日常時には日常とは異なる空間の領域分けがなされている。

6. 納西族の住居

6.1 モソ人住居とナシ人住居の比較

以上をまとめると、モソ人とナシ人の住居の平面構成は、かなり共通している部分が多い。それにもかかわらず、生活や主室内での領域区分ははっきりと異なっている。すなわち、モソ人は下のイロリを中心に日常生活をおこない、男女や上下の領域はイロリの四辺に平行な2本の軸によって分けられる。一方、ナシ人は上のイロリを中心に日常生活が営まれ、男女や上下の領域の別は、イロリの2本の対角線を軸として分けられる。つまり、納西族の中に異なる2つの空間概念が存在していることになる。ただし、モソ人は非日常時には上のイロリと下のイロリの立場が逆転すること、家長のベッドが神と対極的な位置の角にあることから、モソ人の空間概念の中にも斜めの軸線が見え隠れしている。

ところで、住居を建設する際、モソ人もナシ人もラマやダバに相談したうえで、主屋の向き（入口の方位）を決定している。そのため、住居の向きにも何らかの規範が存在すると思われる。そこで、主屋の向きと方位との関係をあらわしたのが表-7である。この結果を図示すると、南北をつなぐ方位の軸が上述の空間領域とぴったり重なることがわかる（図-15）。

一方、入口の方位と湖の方向とは相関が見られなかった。

6.2 他の文献にみる納西族の住居

白庚勝によれば、納西族の神話では、9人の男神と7人の女神によって天地が開闢された後、その東・西・南・北にそれぞれ柱が立てられ、最後に、天を持ち上げ地を鎮めるため中央に柱が立てられたという¹⁸⁾。さらにC.F.マッカーは、納西族の住居の中心柱ムドゥは「天の支柱」を意味するとしている¹⁹⁾。つまり住居（主室）は、納西族の世界観を投影していると捉えることができる。

またマッカーは、集落内の火葬空間と祭祀空間において、南北軸と東西軸が存在するらしいと述べ²⁰⁾、南北軸は社会的地位の区別（北＝上位、南＝下位）をあらわし、東西軸は男女を分けるとしている。

現在の納西族（ナシ人）の住居としては、麗江地区の中庭型住宅がよく知られている。しかしそれらは、主屋が3列構成になっているなど、かなり漢化されたものと考えられる。というのも、例えば明の正徳期に編纂された『雲南志』によれば²¹⁾、かつての麗江の住居は、累木式構法で、主室の四周に寝台となる台が設けられ、室の中ほどに台と同じ高さでイロリがあり、そこで煮炊きがおこなわれていたという。つまり、現在の麗江地区の中庭型住居よりも、本稿で述べてきたナシ人住居に近いのである。また麗江郊外では、

・ラマとダバが来る。ラマは上図の位置に座り経を唱える。その後、今度はダバがその位置に座り葬式の日程を占う。
・遺体を焼く3日前に棺桶をつくり遺体を入れて縁台に置く。

・新婦は親戚の男性に背負われて新郎の家に来る。
・山盛りのご飯に鉛直に棒を3本刺し、ダバの経の後、新郎がこの上に3回手をかざして拝む。

・13才の元旦の朝早くに、縁台に豚の薫製を置く。その上に子供を立たせる。ダバが経を読んで子供に民族衣装を着せる。
・村内の老人を訪ね歩いた後、村人を招いてごちそうする。

図-12 葬式における座位(N-03)

図-13 結婚式における座位(N-01)

図-14 成人式における座位(N-03)

表-7 主屋入口の方位

		北	北東	東	南東	南	南西	西	北西
モソ人	ジョア村	0	0	7	0	0	0	1	0
	ロシュ村	0	0	24	7	0	0	0	0
	チョンシュ村	0	0	1	0	0	0	0	0
	モソ 合計	0	0	32	7	0	0	1	0
ナシ人	ダージ村	0	0	0	31	1	0	0	0

図-15 方位とヒエラルキーの軸

場所・調査時期は不明

図-16 モソ人住居の事例（『納西族史』より）

浅川滋男らによって3列型の中庭型住居と本稿の調査住居との折衷的な事例が報告されている²²⁾。

図-16は郭大烈によって紹介されているモソ人住居の間取りである²³⁾。ごく簡単なスケッチであるため、どの程度正確か判断が難しいが、いくつか特筆すべき特徴が見られる。ひとつは、板床部分が土間床部分と二分されてなく、主室の図で左下角に寄っている点である。また縁台（図では「高床」）も短く、主室右上あたりにしかない。さらに、板床部分が左下部分に限定されていることによって、下の

イロリの位置も主室左下角のほうへ寄っている。そのため、家長のベッドの位置は、同時に女性が座る場所にもなっている。以上からこの住居には、イロリの四辺に平行な軸が存在するものの、主室における対角線の軸もはっきりと認められる。ただし、この軸は「神一家長」を両極とするため、必ずしも上下をあらわすものではないようである。

調査結果と文献を照らし合わせてみても、納西族の空間概念は、正方形の空間を対角線によって空間分節するのを基本とし、モソ人はそれに加えて十字に分節する空間概念をもつと言える。

7. まとめ

これまでに分析をおこなった古羌系民族(羌族、木雅チベット族、および今回の納西族)の住居を比較し、彼らが共通してもつ空間概念について以下に述べる。

- ① 主室はほぼ正方形である。羌族、木雅チベット族が主室の中心に1本の柱をもつことを考えると、ナシ人も図-15ですでに示しているように、1本柱の場合のほうをより原形に近い型と捉えられる。またそのほうが神話の「天の支柱」とも一致する。
- ② 主室の対角線上に神棚やイロリ、柱(ただし1本柱の場合のみ)が並ぶ。また、その軸によってイロリまわりの男女の領域が分けられる。さらに、イロリまわりの上座・下座も同じ軸に沿って決まる。軸は方位との関係で決まっている可能性が高いが、民族によってその方位は異なる。

最後に、納西族の中でもナシ人のほうは、古羌人のもつ空間概念を脈々と受け継いでいる。しかしモソ人のほうは、他文化の空間概念と混ざり合って、上のイロリの意味と使い方、空間領域・ヒエラルキー等が変容したのではないかと推測する。

本稿で使用した1993年次の資料は、住宅総合研究財団の助成を受けて西南中国民族建築研究会(代表:浅川滋男)がおこなった調査に参加したときのものである。調査メンバーは、浅川滋男(奈良国立文化財研究所)、江口久(国立民族学博物館)、溝口正人(名古屋大学;当時)、杉本和樹(西大寺フォト)、王 惠 君(横浜国立大学;当時)、井上えり子、何 大 勇(雲南大学;当時)である。また1999年次調査は、文部省科学研究費(奨励研究A)の助成を受けておこなわれた。調査メンバーは、井上えり子、大戸宏美(京都女子大学;当時)、大庭広子(同前)、佐竹まど佳(同前)、武田明子(同前)、多田亮子(同前)、永井陽子(同前)、藤本美穂(同前)である。関係機関および各氏に感謝の意を表する。

引用文献および註

- 1) 詳しくは「羌族の住居の空間構成—中国の古羌系民族の住居と集落に関する研究 その1」井上えり子;日本建築学会計画系論文集No.522;1999.8)および「木雅チベット族の居の空間構成—中国の古羌系民族の住居と集落に関する研究 その2」井上えり子;日本建築学会計画系論文集No.530;2000.4)を参照のこと
- 2) 例えば『納西象形文字譜』(章 太 炎;重慶出版社;1935)等
- 3) 『雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究(1)』;浅川滋男他;住宅総合研究財団研究年報 No.19;1992
- 4) 『納西族史』郭 大 烈、和 志 武;四川民族出版社;1994

- 5) 同4)
- 6)

- 7) 1993年の調査の成果は「雲南省ナシ族母系社会の居住様式と建築技術に関する調査と研究(2)」(浅川滋男他;住宅総合研究財団研究年報 No.20;1993)にまとめられている
- 8) トンパ教の僧は本来トンパと呼ばれるが、ゲーズィ村ではダバと呼ばれていたため、ここでは現地の呼び名に従う
- 9) 現地呼称は集落によってやや異なっているため、できる限り共通する音のものを選んだ。ちなみに主室名については、中国の文献では一般に「一梅」で漢訳されており、日本語の音をあてると「イーメイ」となるが、どの集落でも「ジミ(漢語をあてはめると「日米」)とはじめの音が濁っていたため、本稿では現地音に近い「ジミ」を採用した。ちなみに、後述のナシ人は主室のことを「ジメ」「ジクッ」等と呼ぶ。本文では事例数の多かった「ジメ」を採用しているが、同じ古羌系民族である羌族が主室を「ジコ」と呼ぶことを考えると、「ジクッ」との関係は興味深い。さらに、「ジクッ」は本来は『へや』の意であるが、現在は主室の呼び名になった(N-04)」という回答もあったことを付記しておく
- 10) 約6m四方(平均6,091×5,921mm)である。詳細については、「ナシ族の住居の構法に関する研究—中国少数民族の住居と集落に関する研究 その5」(日本建築学会近畿支部研究報告集第40号;大戸宏美、井上えり子他)を参照のこと
- 11) 現地では、通ってくる男性パートナーを「アチュ」と呼ぶところから「アチュ婚」と呼ばれている(女性は「アジャ」)
- 12) 同7)
- 13) 雲南省側については例えば、『永寧納西族の母系制』(嚴 汝 嫻、宋 兆 麟;雲南人民出版社;1991)で、「東協棟か門棟の2階」としているし、四川省側も『最後の母系部落』(李 達 珠、李 耕 冬;四川民族出版社;1996)では、「主室の向かいの2階建物」の2階を使用するとしている
- 14) 図-5に示すように主室には神棚が2つある。しかし上のイロリ側の神棚(図で左側を正面とする)は、日常的に使われている様子がない
- 15) 空間のヒエラルキーの軸は、イロリの中に置かれる鉄製の鍋置ききの置き方にも意識されている。鍋置きには3本の脚があり、そのうちの1本は必ず神の方向に向けることが決まっている(図-11も参照のこと)
- 16) 同10)
- 17) 約5m四方(平均5274×5121mm)である。ちなみに各部の寸法からナシ人の住居では、約25cmをモジュールとした寸法体系が存在した可能性がある。詳細については、同10)。モソ人との規模の差は経済的格差に加え、モジュールの概念の違いが反映されているとも考えられる
- 18) 『東巴神話研究』白 庚 勝;社会科学文献出版社;1999
- 19) 『骨 与 肉:納西伝統建築空間結構中體現的宇宙觀和社会關係』(東巴文化論)郭 大 烈、楊 世 光編;雲南人民出版社;1991
- 20) 同19);ただし「我々が調べた限り、そのような軸への対応は見られなかった」と付け加えられている
- 21) 『雲南志』卷十一;明、正徳。ちなみに正徳期は1506~1521年
- 22) 同3);麗江県龍山郷四村の住宅
- 23) 同4)

(2000年4月10日原稿受理、2000年9月4日採用決定)